

公爵令嬢は我が道を  
場当たりに行く





エリザベス・マクナガン

日本人として生きて死んだ記憶がある。が、その記憶には今いる世界の情報が何もない。ならば普通に、あるがままに生きるしかあるまいよ、と聞き直り肚を括る。愛称はエリィ。



レオナルド・フランシス・ベルクレイン

王太子にして、エリィの婚約者。非常に聡明、且つ常識人。政略を考え、エリィを婚約者を選ぶが——？ 愛称はレオン。



登場人物紹介  
characters



**マクナガン公爵**  
(エルード・マクナガン)

エリイの父。  
事なかれ主義、万歳。



**マクナガン公爵夫人**  
(ファルダ・マクナガン)

エリイの母。  
(一見) おっとり  
穏やかな美人。



**王妃陛下**  
(アシュリー・ベルクレイン)

レオン、リナリアの母。



**国王陛下**  
(カール・エディアル・ベルクレイン)

レオン、リナリアの父。



**リナリア・  
フローリア・  
ベルクレイン**

レオンの妹で、第一王女。  
兄と同様に聡明な少女。





# 公爵令嬢は我が道を 場当たりに行く



## 目次



第1話	エリちゃん五歳。王太子殿下の婚約者となる。	006
第2話	きみとわたしの、はじまりの話。	034
第3話	エリちゃん、初めてのお茶会。〜空が、青いわ……〜	055
第4話	絶対に笑ってはいけない護衛騎士	082
第5話	釣り上げたウザガラミ(メガネ目インケン科)は、リリースが基本。	100
幕間	エリちゃん、きょうの数時間クッキング・ビギナーズ	147
第6話	世界の中心で「イヤアア!!」と叫んだエリザベス	161
第7話	王女殿下と、お兄様と、エリイと。	213
第8話	エリちゃん、ペカペカの一年生となる。	234
番外1	マクナガン公爵家の日常〜爽やかに薫る五月の風に乗せて〜	264
番外2	国王陛下の独り言	284



## 第1話 エリちゃん五歳。王太子殿下の婚約者となる。

どうやら、私は転生したらしい。

前世の記憶とやらがある。ガッツリある。

そのガッツリある記憶の中に『異世界転生／転移』というジャンルがある。更に『乙女ゲーム転生』というものもある。

乙ゲーくさいんだよなあ……。少女漫画でも可だが。

私は公爵家の長女だ。上には兄が居る。彼が後嗣ごうしだ（一応）。

現在、私は五歳。兄は七歳だ。七歳の兄は、子役モデルも裸足で逃げだしそうな美少年だ。それと同じ血を持つ私も、自分でちよっと引くくらいの美少女だ。

そして先日、私の婚約が調ととのった。

お相手は、この国の王太子殿下だった。

高位貴族の美少女に転生！ 足すことの、王太子殿下の政略的な婚約者！ 更に足すことの、殿下も兄も美形！ 全部足して、一切割らない！ イコールで出た結論らしきものはという……。悪役か!? 悪役令嬢転生か!?

そうは思ったのだが、大問題が一つある。

私は、乙女ゲームというものを、ほぼプレイしたことがない。

唯一きちんとプレイしたのは、既に懐<sup>なつか</sup>しいゲームのレベルである某グロリアスな感じの会社が出していた、国盗り的なゲームだ。色んな神様とキヤツキヤウフフしつ、領土を広げていくようなゲームだった。そしてそれをプレイして、『恋愛要素、いらなくね?』と思った私は、それ以降は普通リアルタイムストラテジーの RTS にハマってしまったのだ。ノッブが野望持つてる的なゲームの方が、ぶっちゃけ楽しかった。

私が主にプレイしていたゲームは乙ゲープレイヤーには余りに馴染みがないであろうから、ここでは割愛させていただく。だれか興味持ってくんねーかなー、と前世から思っていた。周囲に同好の士が居な過ぎて寂しい。

乙女ゲームは知らんのだが、『乙女ゲーム転生もの』の小説やマンガは嗜<sup>たの</sup>んでいた。通勤時間が暇だったからだ。

通勤時間にスマホで乙ゲーをプレイしている人などが物語ではよく出てきたが、個人的にソシャゲが嫌いだったので、私はマンガや小説を読んでいた。まあ、フツーにSNSのチェックや更新を追っている個人サイトやまとめサイトを見ている事も多かったが。あまり頭を使わなくても読めるものが好きだった。テンプレさまあ系には、水戸のご老公のような爽快感と安心感があり、暇潰しに最適だった。

とにかく、偏った知識ではあるが、乙女ゲームに転生するという知識はある。そして、乙女ゲームには『ヒロイン』と『攻略対象』がいて、それを邪魔する『悪役令嬢』が居るという知識がある。……私がプレイした懐<sup>なつか</sup>しいゲームには、『悪役』は居なかったが。時代は変わったのか……。彼女は

『悪役』ではなく、正々堂々とした『ライバル』だった。友情を育むルートすらあった。

それはさておき、『悪役令嬢』だ。

悪役令嬢は大抵において、メイン攻略対象である王侯貴族のご子息の婚約者だ。

婚約者を『悪役』とか言うなよ。未来の伴侶に虫がたかってりゃ、そりゃ追い払うに決まってる。正当な権利の主張だろうがよ。そう思いはしても、何故か彼女たちは『悪役』とされてしまうのだ。非常に納得がいかない。

王太子殿下との婚約が成ったと父に聞かされ、「もしかして……」と思ってしまったのだ。

よくあるパターンでは『自分が大好きで、やり込んだゲームの世界』に転生するものだが……。

私が好きでプレイしていたゲームで、この世界の地名や地図は見た事がない。……いやまあ、第二次世界大戦真っ只中の東欧とか、転生なんて絶対したくないけども。

となると、だ。

この世界は、『ゲームとか全く関係ないただの異世界』か、『私がプレイしない類たぐいのゲームやマンガ・小説の世界』のどちらかだ。

後者の場合、どんな過酷な運命になるのか分からない。

だがまあ、嘆いても仕方ない。私はここが何らかの物語の舞台であったとしても、シナリオを知らない。故に、フラグの存在も分からない。

つまりだ。

あるがままに生きるしかないのだ。ゴーイング・マイウェイだ。

僕の前に道はないのだ。……後ろにもない可能性はあるが。

退路は確保しておきたい。安全に敗走出来る事が、立て直しの一步となる。後ろの道は確認しておこう。そうしよう。

とにかく、乗っかって進むしかない。

現在五歳の美少女に出来る事など、その程度でしかなかろう。

そう肚を決めた私は、父に告げられた顔合わせの日時を頭に刻み、侍女たちとドレスを選ぶのだった。

一週間後、私は王宮の庭園に居た。

まあ、どくらい広いですわ！（イントネーションがおっさんになったあなた。正解です）

バランスよく木々が配された庭園は、見晴らしの良い場所と、丁度良く隠れる場所などが作られている。隠れるような場所はそれでも決して完全な死角を作らず、ここで暗殺なんてしようと思ったらホネが折れるだろうな、という絶妙な作りだ。数百メートル先からのヘッドショットなどを警戒する必要がない世界なので、物理的な危険は少なそうである。この世界には、銃が存在しないからだ。

執事のような老齢の男性に促され、父と共に設しつちえてあるテーブルに着く。

椅子に座つてもなお、私は庭を見回していた。自分がスナイパーだとしたら、どこを陣取ろうか

と考えながら。

これがゲーム脳である！

世界遺産の遺跡を見てバルクルの経路を考えてしまったり、現金輸送車を見て襲った後の逃げ算段をつけてみたり、大河ドラマを見て頭の中で戦の陣形を考えてみたり。ゲーム脳とは、非常に恐ろしい病である。これだけで数時間は潰せるのだから。

建物の右手に、大きくせり出した翼がある。けれど距離が近すぎて、あそこではきっとスコップが反射してしまう。東向きの窓になるから、夕方以降ならあそこからでもイケそうだ。

それより、その翼の屋上がいいだろうか。距離にして十数メートル延びてしまいが、撃ち下ろしになるから減衰はそう多くなかろう。角度を取って伏せたらいいだろうか。

ああでも、あちらの木の上もありかもしれない。

射角的に遮るものはほぼなし。翼に当たる風向きによっては、風力を考慮に入れる必要がある。スコップの反射はほぼなし。音に關しても届かないだろう。問題は、どうやってあの木に潜むかだ。そんなかなりどうでも良い事を考えていたら、建物の方からさわさわと音が聞こえてきた。

父と目配せをしあい、立ち上がり礼を取る。暫くその体勢でいると、数人の人々がすぐそこで足を止めた気配がした。

「顔を上げてくれ」

少年らしい高い声。けれど、人に命じ慣れている音。

言葉に従い顔を上げると、そこには護衛を引き連れた王子殿下が立っていた。

さらさらと風に靡く音すらしそうな、綺麗な金の髪。決して不健康そうには見えない、シミ一つない白皙はくせきの肌。貴石を嵌め込んだかのようにキラキラとした碧眼。

総じて、作り物じみた美しさの少年である。美少年マニアの人形師が、心血を注ぎあげて作り上げた傑作、といった風情だ。

「今日はわざわざ来て貰もらってすまない」

「とんでもない事でございます。お招き、ありがとうございます」

礼を述べる父に合わせ、私も膝を折った。

そこへ殿下が歩み寄り、目線を伏せていた私の正面にすつと手を差し伸べてきた。

「顔を上げてくれないか、レディ。私は今日は、君と話をしたいんだ」

差し出された小さな手を、じつと見つめてしまった。

おそらく絹であろう素材の、とても素晴らしい縫製の手袋。何という事だろう。礼装に白手とは！ 私の憧れの衣装ではないか！

この素晴らしい白手袋に、触れても良いのだろうか。いや、殿下に手を出させつ放しの方が無礼か。

恐る恐る殿下の手に自分の手を添え、顔を上げ立ち上がる。そのまま、殿下は私をエスコートし、椅子へと案内してくれた。

侍女たちがお茶の用意をし、テーブル周辺からすつと下がっていく。彼女たちの仕草に一切の無駄がなく、且つ洗練かされていて、『王宮の侍女』という人々の仕事の練度に素直に感嘆する。

殿下と共に現れた護衛たちは、それぞれ距離を取り、テーブルとその周囲を警戒している。彼らの視野の交差の仕方からいって、テーブルを中心とした二六〇度程度は警戒範囲だ。残りの百度は彼らがやってきた王宮方面であるから、そちらはそちらで別の警護の人間が配されているのだろう。実に無駄がなく素晴らしい。

また狙撃計画を練り直さねばならない。素晴らしい護衛たちのおかげで、ちょっと楽しくなってきた。

インボッシブルなミッションに挑んでこそそのゲーム脳だ。

少しわくわくしつつそんな事を考えていた私に、殿下がにっこりと微笑んだ。

笑顔が！ 胡散臭い！！（歓喜）

一見、とても優しい笑顔だ。だが、目が僅かにこちらを警戒している。警戒している事に歓喜しているのではない。笑顔が胡散臭い事に閃してだ！

清廉潔白で真っ白も真っ白、漂白剤も驚きの白さのような人とは、上手く付き合っていける自信がない。何故なら、自分がそれほどの聖人でないからだ。

水清ければ魚棲まずと言うが、私は真っ先に逃げ出すタイプの魚ちゃんだ。相手が良い人ならば良い人なだけ、自分の汚さを思い知って委縮してしまう性質だ。

だからと言って、真っ黒でも困るのだが。

「さて、エリザベス嬢……」

声をかけられ、殿下を見た。そういえば、自己紹介などをしていない。

まあ、あちらも既に『婚約者』となっている私の事など、私以上に詳しくご存じの可能性があるが。

「はい。エリザベス・マクナガンと申します。拜謁できました事、恐悦至極に存じます」

ふかふかと頭を下げた私に、殿下がくすつと小さく笑われた。

『くすつ』ですってよ！ しかも嘲笑ではなく、思わず漏れた感じの笑みで！ 美形は素晴らしいですわね。何しても様になりますわね。

「君の名前などは既に承知だ。調べぬ訳にはいかないからね」

「仰せの通りでございますね」  
そらそらだ。

頷いた私に、殿下が僅かに怪訝そうに瞳を細めた。

あら。美形はいいわねえ（以下略）。

その怪訝そうな目で父を見ると、殿下は小さく息をついた。

「公爵、ご息女は五歳ではなかったか？」

「五歳でございます。間違いございません」

苦笑する父に、殿下は「そうか……」と何か納得いかない様子。

五歳よく。エリザベスです。五歳です。

五歳の女児にしては選ぶ語彙が固いかもしれんが、発声はきっちり舌つ足らずだ。問題ない。見た目もきっちり幼子だ。更に問題ない。



殿下は顔を上げると、私を見て軽く首を傾げた。その僅かな動作に、殿下の金糸のような前髪がさらっと揺れる。

美形はいいいわね（三度目）

「君が名乗ってくれたのだから、私もそれに倣おう。レオナルド・フランシス・ベルクレインだ。レオンとでも呼んでくれ」

呼んでくれ、と言われてもね、と曖昧に微笑んでおいた。チョーシに乗って「ハイ、レオン！元氣かい？」とか言ったら無礼討ち……とか、なくもないかもしれないしね！そもそも初対面なのだから、『適切な距離』は大切だろう。

「折角、婚約が調ったのだから、今日は少し君と話をしたいと思っただが……」  
が？ やっぱやめめた、的な？

何が続くのかと首を傾げた私に、殿下はまた「くすつ」と小さく笑われた。その「思わず漏れました」って笑顔、すごく卑怯だわ！

「君は今流行しているご婦人のドレスの型を知っているかな？」

「ご婦人のドレスなど、母が着ている物しか存じません。ですので、それが流行っているのか廃れているのかの判別が付きません」

まだ夜会に出るような歳でもない。茶会などは母に連れられて行く事はあるが、あの場で着用するドレスは夜会のそれとはまた違う。そして私に用意されるドレスは、子供向けの可愛らしい物ばかりだ。

……まあ、五歳のピア樽のような体形の子供に、背中と胸の開いたイブニングを着せても仕方な  
かろうが。それはそれで、もしかしてどっかに需要があるのか？

しかし何故にいきなり、ドレスの話？ 王太子妃たるもの、流行にくらい敏さとしくいろつて事？

頭の中に「？」ばかり並べていると、殿下が僅かに苦笑した。

「好きな花などはあるかな？」

「花……でございますか……」

ぶっちゃけ、ほぼ興味がない。

食べられるなら別だ。菜の花やハーブなどは、私の中では『花（観賞用）』というカテゴリでな  
く、『食品』や『薬品』だ。山菜にも一家言ある。

この庭園にも沢山の花があるが、薔薇くらいしか分からない。しかも多分、その薔薇も数種類の  
品種が植わっている。色違いや、形が違うものが見受けられるからだ。

しかし私の中では、『全部まとめて薔薇。なんなら、全部花』だ。

「もしや、興味がないかな？」

苦笑したままで促してくれた殿下に、何だか少し申し訳ない気持ちで頷く。

「……はい。綺麗だとは思いますが、個々に思い入れなどはございませんし、名なども存じませ  
ん」

女子としてどうなのか。いや、令嬢としてどうなのか。

これはいかん。ちょっと恥ずかしい。ちょっとだけ勉強しよう。せめてこの庭に咲く花くらいは、

覚えておこう。

「では、君の『好きなもの』は何かな？」

「好きなもの……で、ございますか……？」

「そう。例えばご令嬢であれば、ドレスであったり、宝石であったり」

ああ、そういう事か。

納得して、申し訳なさから苦笑してしまう。

「お花であったり……でございましょうか」

「そう」

殿下も同じく苦笑する。

通常のご令嬢との会話のとっかかりだったのだ。

これは申し訳ない!! ことごとく興味が無い!! 何てこった! ちょっと恥ずかしい!!

「お、お花は、えっと……」

いかん。まるで知らん。賭けてもいいが、この話題は広がらん。

軽く俯いてしどろもどろになっていると、殿下が小さく息をついた。

「いや、花はいい。……君は、本などは読むかな？」

「読みます……」

ええ、読みます。五歳の女兒は読まないであろうものを。

「最近読んだ本のお話を聞かせてくれないか？」

「最近……」

どうしようか。この世界で女の子に有名な『緑の王子様』という童話の話でもして、お茶を濁しておこうか。それとも、女の子が憧れるらしい『宝石姫』の話にしておこうか。

「エリイ、正直にお話しなさい」

少しだけ呆れたような、諦めたような父の声に、顔を上げた。父は既に、自分の娘が『一般的な五歳の女兒』らしくない事くらい、百も承知である。

しかし正直に……か。いいのか、父よ。

そういう思いを込めて父を見ると、父は一つ頷いた。

ええい、女は度胸だ！

「最近、ハラルド・ベーム著の『デイマイン帝国興亡史』の下巻を……」

「…………は？」

たっつぷりと間を取って、殿下が呆気にとられたような声を出した。

あらく、間の抜けた顔も絵になるわねえ。美形は（以下略、四度目）。

殿下は何かを確認するように父を見ている。その視線の先で、父は苦い顔で頷いている。

「どうも娘は、一般的な女兒の好むような物語を好みませんで……。童話なども買ひ与えたのですが、一通りざっと読んだ後は手に取る事もしませんで……」

それは人聞きが悪い！

まるで私が本を雑に扱っているようではないか！

「そのような事はありません！『リベア王女の宝冠』は宝物です！」

女兒に好まれる絵本の一種である。絵本だつて大事にしていますアピールだ。

だが私の必死のアピールに、父は深い溜息をついた。

「……話の内容が好きで大切に行っている訳ではないだろう……」

「それはそうですが、いけませんか？ お父様にいただいた本で、あれが一番大好きなのですが……」

『リベア王女の宝冠』とは、昔々ある所にいたりリベアという王女様が、魔女に呪われた兄王子を助ける為に、呪いを解くとされる冠を編む話だ。

前世の白鳥の王子に似ているかもしれない。呪われた王子が一人しかないだけ、こちらの方が良心的である。最後は無事に呪いの解けた王子が王となり、王女はそれを生涯献身的に支えたという、恐らくハッピーエンドなのであろう話である。

要は、女は男を支えるものより、みたいなお話だ。別にそれに言いたい事がある訳ではない。そういう価値観の世界である、というだけだ。

その絵本の何が大切かというと、父がくれたのは約二百年前に出版された初版だったのだ！しかも挿絵が、有名画家のマルクス・ベルナルだ！装丁も非常に凝っていて、間違っても『子供向けの絵本』ではない。

前世で言うなら、シンデレラでも白雪姫でも何でも構わない内容で、挿絵がレンブラントだったとでも思ってもらえたら良い。

二百年前の風俗なども知れる、細緻さいちで優美で写実的な絵柄なのだ。

私はそれを、専用の展示台を作ってもらい、そこに飾っている。当然、直射日光と紫外線は敵である。寝室の、光の当たらない場所に設置してある。

眺めているだけで幸せになる、素晴らしい一冊だ。

「……つまり、芸術品として大切にしている、と」

僅かな呆れを滲ませて呟いた殿下に、私は軽く首を傾げた。

「だけではありません。確かに、装丁も素晴らしく、芸術品としても価値はございましょう。ですがそれ以上に、バーンスタイン書院版の初版である事や、一ページの抜けもない事など、稀観本きこうぼんとしての価値もはかり知れません」

それに何より、単純に全てが美しいのだ。

「それにしても、ハラルド・ベームの興亡史か……」

呟くように言うと、殿下はこちらを見て軽く微笑んだ。

「何故それを読もうと？」

ディマイン帝国とは、約四百年ほど前に滅んだ国である。

現在その領土であった土地は、三か国に分割され統治されている。

王城跡地は現ミスラス共和国にあり、観光地となっている。現在では城壁の一部と、城郭の土台が残る程度である。一回、行ってみたい。

約二百年に及んだディマイン帝国の興りから滅亡までを、多彩な資料で多角的な観点から考察す

る歴史書だ。刊行は十五年前なのだが、それまで定説とされていた滅亡のきっかけとされる『オーガルシア戦役』のとらえ方や、八人の皇帝の描き方などが独特で、現在も歴史学者たちの間で評価が割れる書である。

何故読もうと思ったかと問われたら、面白そうだったからだし、興味があつたからなのだが。恐らく殿下が尋ねたいのは、『そもそも何故興味を持ったのか』だろう。

「以前、『悠久なるアガシア』を読みまして——」

「いや、ちょっと待ってくれ」

出だして遮られた。

うん、まあね。そうかなとは思った。

「読んだ？ 『悠久なるアガシア』を？」

「はい」

「……公爵、貴方のご息女は、私の理解を超えるようだ」

溜息をつきつつ父を見た殿下に、父も同様に溜息をついた。

「我々家族は既に、理解は諦めております」

父、酷え!!

『悠久なるアガシア』、またの名を『立派な鈍器』。

厚さが十センチはあろうかという、よくもまあ詰め込んだな！ と言いたくなる、分厚過ぎる本だ。しかもこの世界にペーパーバックなどない。ハードカバーだ。

漬物石にもなるかもしれない、立派過ぎる鈍器だ。

幼女の腕でアレを持つのは容易ではなかった。一度机に広げ、ひと月そのままそこにあり続けた。動かすのすら億劫な、素晴らしい重さである。

内容は、アガシア大河という巨大な河と、その沿岸の歴史だ。前述のデイマイン帝国も、アガシア大河流域に興った国である。

それを見て興味を抱いたのだ。

広大な版図はんとを持ち、商業・農業等の国力も豊かで、強大な軍事力も持ち、先進的な文明すらあった大帝國。それが今は、世界地図から消えているのだ。

浪漫しかないじゃん!! 調べたくなじゃん!! ……異論は認めよう。

「……『悠久なるアガシア』を読み、デイマイン帝国に興味を持った、と」

は……と溜息をつきつつ言った殿下に、私は頷いた。その溜息、失礼じゃね？

「仰せの通りです。興味を持ちましたので、まずはネルソン・コキウスの『デイマイン帝国の光と影』を読みまして、次にアウレリウス・ワッツの『デイマイン帝国―二百年の栄光―』を、そして興亡史を……という具合に」

「君は歴史学者志望なのかい？」

何やら疲れたような表情をなされた殿下が、やはり疲れたような口調で尋ねてきた。

「いいえ？ 単に、興味があったから読んだだけですが。娯楽の一つ、みたいなものでございませす」

「……娯楽」

「はい」

「少々、変わった娘でございまして……」

だから父よ！ 娘への評価、酷くない!?

次回会う時には、君の好きそうなものを用意してみよう、と別れ際に殿下は仰った。

何を用意してくれんのかな。ディマイン帝国の遺跡のあるミスラス共和国行きの旅券とかだと、飛び上がって喜ぶんだけどな。



私は七歳になる年の春に、立太子の儀を受け、王太子となった。

これは慣例に則のっとったもので、王族の嫡子であり、資質に問題なしと議会で承認を得られたなら、七歳で立太子される。

下には妹が二人いる。もしも自分に何かあったなら、妹たちのどちらかが女王として立つ事になる。そうはならぬよう、気を付けたい。妹たちにいらぬ重荷を背負わす事はない。

立太子を済ませたら、将来の伴侶を選定しなければならぬ。放置していても問題はないと言え  
ばないのだが、『王妃』という座に色気を出す連中が鬱陶しくて煩いので、さっさと済ませられる

ならそれに越した事はない。

現在、国内の情勢は安定している。近隣諸国には多少のキナ臭さはあるものの、平常の範囲内だ。つまり、大きな政略としての婚姻は必要ない。

王や王妃、そして廷臣たちとの協議の末、私はマクナガン公爵の娘との婚約を決めた。内定した時期は私が八歳の頃であるのだが、公爵家へ正式に通達するにはその後一年程度の時間が空いた。どうせなら煩い連中を黙らせてからにしようと思ったからだ。

マクナガン公爵家の娘は私の四つ年下だ。年齢差があり過ぎるという程でもない。

マクナガン公爵家は、五つある公爵位の序列三位だ。発言権はそれなりにあるのだが、そもそも大きな発言をしない。日和見などと言われる事もあるが、どちらかというとな穏健・事なかれ主義の家である。大きな派閥を率いる事もなく、属する事もない。けれどかの家を慕う貴族は多い。

中立の中立。

自身の娘を推してくる連中が多すぎて、それらを黙らせるのに時間がかかった。相手を穏健派と見て、己の資格が下であるにも関わらず捻じ込めると踏んだのだろう。そういった欲を出す時点で、その家は除外されると気付かぬのだから、話にならんのだが。

その間も、渦中のマクナガン公爵家からは、何一つ発言はなかった。推すような素振りもなければ、引くような素振りもない。

何だか不思議な家だと感じた。

問題があるとするならば、エリザベス・マクナガンという少女について、これといった情報がな

い事だ。絵姿は公爵から入手した。とても愛らしい少女の絵姿である。

ふんわりと波打つ色の薄い金の髪に、若葉のような明るい緑の瞳。ふつくらとした唇に、小作りの鼻。椅子にちょこんと座った肖像で、その様はお人形のようなのである。

まあ、それを丸つと信じるような事はないが。

どうにか頼み連中を黙らせ、婚約を調べた。神前に提出する書類と、貴族院の調停所へ提出する書類と、王宮で保管する書類を作成し、公爵にも了承を得た。

公爵は全てを王命と肅々と従って動いていたが、全ての書類に署名を終えた後で、私を見て苦笑して言った。

「もしも娘がお気に召さなければ、いつでも白紙撤回に応じますので」と。

思わず、公爵の欲の無さに呆れてしまった。家長がこれで、公爵家は大丈夫なのだろうか。けれど公爵の言葉の意味を、私は彼女との初対面で知る事になる。

あれは、欲がないのではなかった。娘が風変わり過ぎるが故の心配だったのだ。

公爵との会見後から私は一応、対面の前日まで、四つ年下の少女と何を話せばいいかを考えていた。

三つ年下の妹は、父に誕生日に貰った人形に夢中だ。城内で偶然を装ってすり寄って来るご令嬢たちは、ドレスや宝石、美しい花や絵物語が大好きなようだ。

どれも、私自身が全く興味のないものばかりである。

それでも少しは話を合わせる努力をしようか、と、植物の図鑑や流行の物語などを読んでみたりした。まさかそれが、全く無駄な努力になるとは、思いもしなかった。

当日、会場として指定したのは、特に薔薇の花が美しく配置された大庭園だ。『女性は大抵薔薇が好き』という、雑な先入観からの選択である。

会場へ向かう途中、設えられた場を遠目に観察した。令嬢とその親が、こういった態度でこの場に臨んでいるのか、それを観察する為だ。

二人は特に会話をしている風ではない。公爵はのんびりと庭を眺めていて、ご令嬢も庭を眺めている。護衛からオペラグラスを借り私はご令嬢を観察した。

庭を見ている。見ているのだが、彼女の視線の高さは、薔薇などの低木より高い場所を見ているようだ。

何を見ているのか？

視線を追ってみるが、彼女の視線の先には王宮のヘーベル翼がせり出しているだけだ。建築に興味があるのであれば、ヘーベル翼の構造も面白いかもしれない。だが、五歳の少女が？ 更に視線を追うと、庭の向こうの何もない場所を見て頷いている。

謎しかない。

あのご令嬢で本当に良かったのだろうか。

少しだけ不安になりながら、護衛にオペラグラスを返し、会場へと向かった。

私が到着した事に気付いた二人が、深々と臣下の礼を取る。それを直させると、二人を席へと促した。

着席したエリザベス嬢を見ると、驚いた事に絵姿よりも愛らしい見た目をしていた。

絵では表現しきれない、けぶるような淡い金の髪や、キラキラと明るい瞳など、細かい差異を挙げたらきりが無い程だ。

絵姿を上方向に偽る者（特に女性）は珍しくないが、下方向に偽る者は初めて見た。いや、偽っているつもりはないのかもしれない。画家が描き切れなかっただけかもしれない。

お茶の用意を下がる侍女を、エリザベス嬢は感心したように見つめている。何にそれほど感心しているのだろうか。更には離れた場所に待機させた護衛騎士たちを見、うんうんと頷いてもいる。貴人の前に姿を晒す護衛騎士たちは、特に見目の良い者を選ぶ。いかにも強面を引き連れている、相手を警戒させてしまうからだ。

彼女も恐らく、彼らの見目の良さに満足したのでろう。

とりあえず今日の目的は、前情報の全くないエリザベス・マクナガンというご令嬢の事を少しでも知る事だ。それによって、王太子妃としての教育内容を考えねばならないからだ。

実は使用人に混じって私の教育係のナサニエル・ヴァレン師も居る。つまらぬ会話になるだろうが、受け答えなどから教育の程度を見極めてもらう為だ。

さあ始めようかと、彼女に声をかけた。

すると彼女は開口一番、「エリザベス・マクナガンと申します。拜謁できました事、恐悦至極に存じます」と、淀みなく述べた上で頭を下げてきた。

そう言えと教えられていたのだろうか。五歳にしては、言葉選びが固すぎやしないだろうか。

彼女も苦勞しているのかな、と、自然と笑みが漏れてしまった。

教えられた挨拶ならば、こう返してみたらどうなるか、と少しだけ悪戯心が湧いた。

「君の名前などは既に承知だ。調べぬ訳にはいかないからね」

既に知っていると伝えたら、どのような反応をするだろう。

これまで出会ったご令嬢たちは、大抵頬を染めて喜んだりした。中には驚く者もいた。ところが、  
だ。

「仰せの通りでございますね」

言葉通り、何も驚くこともなく、エリザベス嬢はいかにも納得した風に頷いている。

何だ、この少女は？

権力欲のない、中道も中道の家だ。その娘に権力欲がなくても不思議はない。それ以前に、五歳の少女に『王太子妃』のなんたるかが分かっていない可能性もある。

しかしこの少女は、恐らくそうではない。

そういった事を理解したうえで、『婚約が調っているのだから、名前くらい知っていて当然』と、  
初対面にして理解している節がある。

何だ？

私は思わず公爵に、「本当にご息女は五歳か」などと馬鹿げた質問をしてしまった。間違いないと苦笑する公爵の隣では、エリザベス嬢がにこにここと、何か微笑ましいものを見るような目で私を見ている。

そうだ、これはあれだ。祖母が私を見る目だ。

いや、待ってください。私の方が四つも年上なのだが？ 彼女は今、まだ五歳でしかないのだが？

「君が名乗ってくれたのだから、私もそれに倣おう。レオナルド・フランシス・ベルクレインだ。レオンとでも呼んでくれ」

そう言ってみると、彼女はまるで「どうしよっかな」とでも言いたげな曖昧な笑みを浮かべた。何だろるか、この少女は。調子が狂って仕方ない。

その後、何とか会話を……と、流行のドレスの話や、好きな花などの話を振ってみた。

結果、見事に全て空振った。

これ程までに、打っても響かないご令嬢は初めてだ。

しかも、それらに興味がない事に恥じ入って、僅かに頬を染めて俯いている。いや、別に興味を抱いて欲しい訳ではないから、そこまで恥じなくても良いのだが。

今日の為に用意した話題は、どれも使えそうにない。ならばもう、自分の引き出しにある話題しかない。

「君は、本などは読むかな？」

一応、流行の恋物語などもおさえてきた。定番の絵本などなら、楽勝だ。

さあ来い！と待っていると、エリザベス嬢は僅かに言い辛そうに「読みます」と小さな声で答えた。

何故そう言い辛そうなのが気になったが、私は話を続ける事にした。

「最近読んだ本のお話を聞かせてくれないか？」

「最近……」

えらく言い出し辛そうだ。俯いて、難しそうな顔をしてしまった。まさか、本を読むというのが嘘で、最近読んだ本などなかったのだろうか。

「エリイ、正直にお話しなさい」

随分迷っているようなエリザベス嬢を、公爵が呆れたように促した。それに彼女は、本当にいいのかと問うように公爵を見てから、おずおずと口を開いた。

「最近、ハラルド・ベーム著の『デイマイン帝国興亡史』の下巻を……」

………え？ ……は!?

ベーム博士のその本ならば、私も読んだ。ナサニエル師に薦められたからだ。

ちらりと視線を動かしてみれば、従僕のお仕着せを着たナサニエル師が、えらく驚いたように目をつまみ、幼児が大人ぶりたくて、大人の読むような本をぺらぺら捲<sup>めく</sup>ただけで「読んだ」と言い張っている訳ではないようだ。

驚きそのままに公爵を見れば、公爵は苦々しい顔をして頷いた。

つまり、幼児が大人ぶりたくて、大人の読むような本をぺらぺら捲<sup>めく</sup>ただけで「読んだ」と言い張っている訳ではないようだ。

それにしても、五歳が読むには難解に過ぎないだろうか。

今は亡きデイマイン帝国の使用言語であるデイマイン語の引用も多く、副読本なしに読破は難しかったのだが……。それ以前に、五歳の少女が亡国に興味を持つ事が珍しい。

何故それを読もうと思ったのかと尋ねると、更なる驚きの回答がやってきた。

「以前、『悠久なるアガシア』を読みまして——」

「いや、ちょっと待ってくれ」

いや、本当に待ってくれ！

発言を遮ってしまつて申し訳ないだとか以前に、言っている内容が分からない。いや、分かるのだが、理解が出来ない。

「読んだ？ 『悠久なるアガシア』を？」

尋ねれば、当然のように「はい」と頷かれた。ナサニエル師はとうとう、頭を抱えて蹲うずくまつてしまつている。羨ましい。私もその体勢を取りたい気持ちだ。

『悠久なるアガシア』は、別名『鈍器』だ。

王立学院の歴史学科では必読図書とされているが、挫折する者を何名も出す分厚い歴史書だ。

私はまだ、全て読み終えてはいない。あと三分の一ほど残っているのだが、その三分の一で通常の書籍の倍程度の量がある。

確かに、あの書の中でデイマイン帝国の興亡はかなりのウエイトを占める。アガシア大河流域の文明において、デイマイン帝国は中興の祖と言われているからだ。

「……『悠久なるアガシア』を読み、ディマイン帝国に興味を持った、と」

つまりは、そういう事なのだろうか。

筋は通っている。幼女の見栄などではなく、真実、歴史を学ぶ者のたどる道筋だ。

「仰せの通りです。興味を持ちましたので、まずはネルソン・コキウスの『ディマイン帝国の光と影』を読みまして、次にアウレリウス・ワッツの『ディマイン帝国―二百年の栄光―』を、そして興亡史を……という具合に」

いや、本当にもう勘弁してくれ。

ディマイン帝国という亡国を知る為の、正しい道筋をきちんと辿っている。五歳の少女が。

『ディマイン帝国の光と影』は、かの国の帝室に焦点を当てた書だ。それぞれの皇帝の治世を詳細に調べている。

そして『ディマイン帝国―二百年の栄光―』は、かの国の文化や風俗に焦点を当てた、全四巻構成の書だ。

それらを読んだ上で、新説とされる興亡史……。

頭を抱えて蹲ったままのナサニエル師が、立ち上がる気配すら見せない。普段厳しい師に、これほどの共感を覚えるのは初めてだ。

もうどうしたら良いのか。

……とりあえず、突っ込んでおこう。

「君は歴史学者志望なのかい？」

それに彼女は当然のように「いいえ」と答えた。

「単に、興味があつたから読んだだけです。娯楽の一つ、みたいなものでございます」

娯楽……。鈍器と呼ばれ、挫折する者すら出す本を。私ですら、あれらを『娯楽』とは言えない。

こんな事ではいけないのだろうか、何だか少し疲れてきた……。

その後幾らか会話を交わし、今回はお開きとする事にした。

次回会う時には、君の好きそうなものを用意してみよう、と告げると、彼女は年相応の無邪気で可愛らしい笑顔を見せ「楽しみにしております」と答えた。

二週間後、二度目のお茶会で、私が彼女の為に用意したデイマイン帝国の遺跡から出土したプレスレット（レプリカ）に、彼女が飛び上がりそうなくらいに喜ぶのだった。



## 第2話 きみとわたしの、はじまりの話。

エリザベス・マクナガン公爵令嬢との婚約が調って二年。

初対面ではただただ私が驚かされるばかりで終わってしまった。その後対話を重ね、半年もするとエリザベス・マクナガンという少女の事が少し分かってきた。

彼女は、私の想像を超える人物だった。いや『超える』というと語弊がある。『想像だにしない人物』の方が正確か。

ドレスにも宝石にも花にも興味がなく、贅沢にも全く興味がない。

とてつもない贅沢をしてしまったと彼女が難しい顔をしていたので尋ねてみたら、古代史に出てくる戦場の詳細地図集を購入してしまったのだと告げられた。

確かにアレは書籍としては高額だ。安めのドレスが一枚購入できる程度の値段がついている。大判の地図帳で、通常の書架には収まらない大きさと厚さのものだ。

軍議・戦略などの授業で、私もお世話になっている書である。歴史の授業でも、度々登場する。何故それを購入したのかと尋ねたら、輝かんばかりの良い笑顔が返ってきた。

「もっと効率の良い、死者の出ない戦略があったのでは……と、検証してみたいのです！」  
何故!?

「あと、浪漫です!!」

浪漫!?

エリイは私の学問の師であるナサニエル師と、今では親友と言って過言でない程に懇意である。彼女のこの発言を師に伝えると、師は「エリザベス様はよく分かっておられる」と頷いていらした。

私にはよく分からないのだが、謎の疎外感を覚え少し寂しい。

いや、正直に言えば混ざりたくない気持ちは多少はあるのだが、エリイが私と居るより楽しそうなのも気に入らない。

エリイに対して私は当初、私より四つ年下の少女という事で、平易な言葉を選択するようにしていた。

けれどエリイはすぐにそれに気付き、わざと難解な言葉を選んで話してくれた。それはつまり「この程度までなら理解できるので、噛み砕く必要はありません」と教えてくれたのだ。

それを理解してからは、エリイと話すのが格段に楽になった。楽になったどころか、楽しくなった。

私が苦手とする『女性の好むような話題』は、彼女も私同様に苦手としている。それは例えば、恋愛の話であったり、流行の髪型や服装、化粧品や香水等の美容関係などなどだ。

そして私が得意とする政治や経済や法令、国際情勢などの話題には、彼女は積極的に乗ってくるのみならず、独特の視点から意見までしてくれる。非常に楽しい。

ただ、戦闘関係の話になると俄然がぜん活き活きしだすのは、どうにかならないだろうか……。『効率の良い敵の殲滅方法』だとか、他人が聞いたらぎょっとするところでは済まないのではないだろうか……。

まあ、エリイだから、その辺りは弁えているけれど。

己の分を弁え、歳より大人びているエリイなのだが、「私にだって、剣は使えると思うんです！」とその年頃の子供特有の無邪気な全能感で発言したりする。ならばと試しに模造剣を持たせたのだが、それを『振るう』のではなく、構造を騎士たちと真剣に論じていた。……どうしてそうなる？

その際のエリイの発言を受け、騎士たちに支給されている剣の改良が行われたのは記憶に新しい。ただ、エリイは鈍臭い。

時折、何もない場所でこける。転んだりする前に、私や護衛たちで支えているので大事ないが、彼女にはどうやら透明な段差やでっぱりが見えているらしい。

あそこがちっちゃいでっぱりがあつたんです！ と、照れつつもむくれた表情で言い訳をする。可愛い。

試しにと持たせただけの模造剣で、何故か自身の足を打ち据え、小さな青あざを作っていた。どうしてそうなったのかが、見ていたにも関わらず理解できなかつた。

エリイはやはり「思っていたよりも重量がありまして……」だの、「子供の手には剣が大きかつ

たのでは!」だのと言いつていた。残念だけどエリイ、あれは『幼年用の模造剣』だよ。

この時の出来事を踏まえ、護衛の連中には「エリイに剣などを触れさせぬように」と徹底させている。エリイにも言い含めてある。本人は少し不満そうだったが、「承知いたしました」という返事ももらっている。

模造剣だからあざで済んだものの、もしあれが本物の剣だったらと思うとぞつとする。

騎士たちも同意見のようで、「エリザベス様には絶対に、剣のみならず『危険が有りうる』と判断できそうなものは触れさせません」ときっぱり言い切ってくれた。

ある時は馬に乗ってみたいというのでやってみたら、馬に完全に舐められていて、歩き出す事すら叶わなかった。どうしても一人で乗ってみたいのだ! と言うエリイの為に、王家所有の馬の中でも一番賢く美しいとされる馬を用意していたにも関わらず、だ。

最終的に座り込んでしまった馬の背で、エリイは諦めて眠ってしまった。

エリイの言う事を聞かなかった馬にエリイは「走らない馬は、ただの馬よ!」と訳の分からない文句を言っていた。いや、それはそうだろう。そして走ったとしても、馬は馬だろう。

厩務員きょうむいんに後でこっそり尋ねたら、「恐らく、自分が動いてしまったのはエリザベス様が落ちてしまわれると、馬なりに気を遣ったのだと思われます。……あの子は、特別賢い子です」との事だった。

馬にも気を遣われるエリイ、鈍クサ可愛い。

そういった微笑ましい日々（感想には個人差はあるだろうが）を重ね、婚約から一年が経った頃、私は国王と王妃に呼び出され尋ねられた。

「エリザベス嬢を未来の伴侶と定めるか」と。

婚約者と定め据え置きはしたが、まだ正式な披露目は済んでいなかったのだ。彼女が事実、その座に相応しいのかどうかの選定が済んでいなかったからである。

そして、私と彼女の相性も不明であったからだ。

一年。

彼女と共に過ごしてみても、ただ聡明なだけではないと知った。知識も興味も多岐に渡り、独特な視点を持ち、けれど決してそれらに驕る事も鼻にかける事もない。

見目は物語に出てくる妖精もかくやという程に可憐であるが、口を開くと驚くような事ばかり言う。そして無駄な行動力もある。己を弁え、出過ぎるような事はない。けれど、引き過ぎる事もない。

私は両陛下をまっすぐに見据え、はっきりと頷いた。

「エリザベスを、我が妃にと望みます」

そう。初めは『このご令嬢でいいか』と定めた相手だった。

けれど、今は違う。

『彼女でいい』ではなく、『彼女がいい』。

私の返事を受け、両陛下も納得したように頷かれた。

婚約の披露目の宴うけに先駆け、私からエリイにそれを伝えた。

「その宴を終えたら君は、国内の貴族全員から正式に『王太子の婚約者』であると認められる。つまり、それ以降は準王族と扱われるようになり、婚約の撤回などは余程の事がない限り不可能となる」

「はい」

真剣な顔でエリイが頷く。

まあ、今更言われなくとも、エリイなら分かっているだろう。けれど、訊いておきたかったのだ。「こちらが勝手に選定し、君の意思などを問わずその座に据えた。不満などがあるのならば、これが最後の機会となる。……私の妃となる事を、了承してくれるだろうか？」

現時点でも充分、撤回などは難しいのだが。

それでももし、エリイが心底嫌がるとすれば、何としてみせよう。ただ、エリイが己の意思で私を選んでくれるならば、私は何を賭けてもエリイを守ろう。

一年だ。

そう長くもない時間かもしれない。けれど、決して短くはない。

その期間、私は彼女を観察でもするかのように見てきた。

聡明で、屈託がなく、けれどただ無邪気なだけではなく、『清濁併せ呑む』という事柄の重要性

を知っている。

笑顔が可愛らしく、少しだけ鈍臭く、小さな体で私の後ろをちよこちよこついで歩く。

私にとつての『エリザベス・マクナガン』は、初対面時の『奇妙な令嬢』という印象から、一年を経て『可愛らしい放っておけない妹』へと変化していた。

友愛と親愛、そして家族愛にも似た愛情を、エリイに対して抱いていたのだ。

エリイは一度軽く目を閉じると、ふー……と静かに深く息を吐き出し、ゆっくりと目を開けた。「これで、私の退路は断たれる訳ですね」

とても静かな声だった。六歳の女兒の発する声ではない。覚悟を決めた女性の声だ。

「退路を断たれたとするならば、貴女はどうするのだ？」

彼女の言う『退路』はつまり、婚約を撤回なりなんなりする事を指すのだろう。

尋ねた私に、エリイは口と口の端を吊り上げるように笑った。

「退路がないなら、前方に血路を開くのみです」

軍略や戦略が好きな彼女らしい言葉だ。頼もしく、力強い。恐らく、エリイの前になら、自ずとその道も開かれよう。

だが――

「ならば道は、私が拓こう。それを共に進んではくれないだろうか」

本当ならば、背に庇いたい。けれど彼女はきつと、それを良しとしない。であればせめて、露払いくらいはさせてくれないだろうか。



「いいえ、殿下」

静かな否定の声に、思わず軽く瞳を細めてしまった。けれどそれにエリイはっこりと笑った。

「共に、道を拓きましょう。そして共に参りましょう」

僅かに好戦的な光を目に宿し微笑んだエリイの顔を、私は恐らく生涯忘れないだろう。

「もしも互いの道が分かれたるような事があるならば、沢山お話をいたしましょう」

「ああ……、そうだな。最後まで、互いを理解する事を諦めないと約束しよう。……では、レディ」

微笑むエリイに向け、私は手を差し出した。

「貴女を生涯エスコートする栄誉を、私にいただけるだろうか」

「殿下がそれをお望みである限り」

そつと添えられた小さな手を、思わず両手で握りしめた。それをエリイは、微笑んで見つめていた。

可愛い妹のような存在であつた彼女が、私の唯一無二の愛しい女性となつた瞬間だつた。

そしてその二か月後、私とエリイの婚約者としての披露目の宴が開催された。

まあ主役が子供であるので、私とエリイは挨拶をして早々に退場となつたのだが。緊張して右手と右足を一緒に出しそうになっているエリイが可愛かつた。

その宴には、招いた覚えもないのだが、私と歳の近い少女らも出席していた。彼女らの両親は確かに招待者の中に居るが。子供が出席したところで、意味のない席であろうに。

そんな風に思っていたのだが、彼女らにとつては意味のある事であつたらしい。

そう。『王太子が選んだ婚約者を見定めてやろう』という、心底下らない意味が。そして『少しでも粗が見えたなら、そこを突いてやろう』という、更に下らぬ意味も。

そもそも、だ。

王族（私）が選んで、その座に据えたのだ。それに文句を言うという事がどういふ意味を持つか。それを彼女らは分かつていない。

その時点で、為政者となるには失格だ。

数人のご令嬢が居たが、その中に妃を選定した際に最終選考近くまで残っていた令嬢も居た。彼女を選んだりしなくて、心底良かったと思つた。

それにエリイに文句をつけるにしても、エリイは国でも三番目の序列をいただく公爵家の娘だ。集まつた令嬢の中には、公爵家の人間は居ない。五つある公爵家の中で、私と歳の近い娘が居る家は一つだけだ。家格で劣るにも関わらず、それを誹謗中傷してやろうという、その浅慮さ加減に辟易する。

その程度の考えしか持たぬ者を、『王妃』などという国の最重要職に就かせる訳にはいかない。

そう。

『王妃』とは、ただの『王の伴侶』ではない。『国』という巨大な組織を運営する、非常に重要な『役職』なのだ。ただ王の隣でニコニコ笑つて、王に愛されていれば良い……などという訳にはいかないのだ。

ついでに言えば、「王妃なのだから、贅沢し放題！」などと考えているような輩は、国賊一步手前であろう。

国庫は私費ではない。そして国とは、王の私物でもない。

けれど、それすら分かっていない大人が居る。そしてその大人に<sup>そそのか</sup>唆された子らが、当然のようにそう考えてしまう。

大人に吹き込まれた子らを一概に責める訳にはいかなだろうが、少し考えたら子供でも理屈は分かりそうなもののだが……。分かんのかな……。エリイはその辺りはきっちり理解していたのだが……。

会場を挨拶回りしていた私とエリイの周りを、数人のご令嬢が取り囲んだ。私と同年代程度の、十歳前後らしき年齢の子らだ。見た目だけで招待客でないと思われる。

全員の特徴をざっと捉え、記憶しておく。後で誰かに、彼女らの素性を調べてもらおう。招待もされていない者を連れてくるような家は、信用がならん。のみならず、その家の者がもし『王位』というものに色気を出すようであれば、それはもう『信用』どうのという話ですらない。

今日の招待客は、エリイもきっちり頭に入れてある筈だ。『成人もしていない子らは、招待客の中に居ない』という事は、エリイも分かっているだろう。

さて、このご令嬢たちは、私たちを取り囲んでどうしようというのかな？ お祝いでもしてくれるのかな？ ……まあ、そんな雰囲気ではないが。

「殿下、この度はご婚約おめでとうございます」

言いながら、代表格らしき令嬢が深々と礼をしてきた。

一言目がきちんと祝いの言葉である事を少々意外に思いつつも、「ありがとう」と礼を返しておく。

頭を下げていたご令嬢方は、一斉に元の姿勢に直った。後ろの方の少女たちは、礼儀作法が苦手なのだろうか、少々ふらついていたりする。

……いや、これくらいの子らであれば、そう咎められるようなものでもないか。エリイが歳の割にきつちりしすぎているだけだな。

代表格らしき少女は、エリイをちらりと見ただけで、エリイには言葉をかけようとしめない。

どう考えてもそちらが格下なのだから、その態度はいかなものかな。まあ、私の知った事ではないか。精々、この先、勝手に苦労するがいい。

「ご婚約のお相手がマクナガン公爵令嬢様という事で、わたくし共はとても驚いております……」

ふむ？ それが何だと言うのか。

「政略で選ばれるにしても、もう少し殿下の御為になるお相手が居たのでは……と」

下らん。

そもそも、『政略で選んだ』からこその、エリイだ。

エリザベス・マクナガンという令嬢を選んだ理由は、『王家とその周囲にとって、可もなく不可もない』という一点のみだ。

特別な利を得る者が居らず、損をする者もない。それは、マクナガン公爵家という家の、独特な有り方が故の理由だ。かの家以外に、そんな不思議な家は恐らく存在しない。

そしてマクナガン公爵家は、婚約の際に『王家のやり方には一切の口出しをしない』と言いつつた。

……逆に怖い。

もし私たちが、後の学者に『世紀の愚策』『稀まに見る失策』などと言われるような事をしでかしたとしたら、あの家の者たちはどう出るのだろうか……。

「ではご令嬢、具体的に『私の為になる』というのは、どういう意味だろうか」

私を真っ直ぐに見据えてくるご令嬢に、質問を返してみた。

それにご令嬢は、我が意を得たりと言わんばかりに、得意げに微笑んだ。

「たとえば、わたくし共でしたら、殿下を心からお慕いし、終生愛しぬくと誓えます」

……その何が、『私の為』なのだろうか……。言つては何だが、それはそちらの『自己満足』なのではなからうか……。

軽く胸まで張っている少女を心底呆れる思いで見ていると、隣のエリイがぼそつと呟いた。

「『心から慕う』だけであれば、別に妃になどならなくても良いのでは……?」

その通り過ぎて、思わず噴き出してしまった。

「エリイの言う通りだ。勝手に遠くから慕っていてくれて構わんな」

「そうですねえ? ……まあ、それが行き過ぎて、行く先々で現れる……とかになったら、少々

恐ろしいかもしれませんが」

……少々どころじゃなく、かなり怖いな……。

「行く先々の物陰に潜んでる的な」

「……いや、やめてくれ。本当に怖い」

まあ、貴族のご令嬢にそんな芸当は無理だろうが。

「そんな事はいたしません！」

いかにも嫌そうに、ご令嬢が声を張った。

いや、その声を張らずとも、誰も彼女がそんな真似をするとは言っていないのだが。あと、感情が素直に顔に出過ぎるな。表情一つ制御できなくては、余計に『王族の伴侶』などは無理なのだな。

「さて、レディ。貴女の提案に私は、全く利も益も見出せなかったのだが。貴女の言う『私の為』とは、それで終わりなのかな？」

ご令嬢は必死に何か考えているようだ。目があちこちを彷徨さまよっている。

よもや、今の話で私がグラつくとも思っていたのか……？ 思慮が浅いどころの話じゃないぞ……？ 浅いのではなく、これはもう『無い』と言っているレベルだろう。

えっと、えっと……などと無意味な呟きを漏らしていた令嬢は、ややして「思いついた！」とでも言いたげに顔を上げた。

……エリイ、お願いだから、隣でご令嬢の動作に合わせて「ピコーン！ 閃いた!!」とか呟くの

はやめてくれないかな……。笑ってしまっじゃないか。こんな場面で笑ってしまったら、このご令嬢のこれまでの言動から考えて、烈火の如く怒り出しても不思議じゃないんだぞ……？

エリイ曰く「ピコーン！」と何事か閃いたらしきご令嬢は、やつと意味のある言葉を口にできるという安堵のような表情を浮かべている。

「わたくし共の提案にりもえき？ もないと仰るのですしたら、公爵令嬢様にはどのような良い事があると仰るのですか？」

……途中に何だか、疑問符が付いていたな。

ああ、そうか。言葉の選択を失敗したか。

エリイと話していると普通に通じるものだから、そのつもりで話していたな。年端もゆかぬ少女には、言葉の選択が固かったか。

まあ、『良い事』と言いつ直しているのだから、意味は通じたのだろう。そう考えると、彼女は頭の回転は悪くなさそうだ。

「特に良い事などはないのですか!? 殿下もこのように、お黙りになってしまわれて……」

「いや、申し訳ない。少々、考え事をしていた」

全く、話題と関係のない事を。

「さて、相手がエリイである事の有益性が……」

だからそもそも、それがあつてこそその『政略』なのだな。

彼女らにとって『政略』というのは、単純に『想い合って結ばれる訳ではない』という意味にしかならないのだろう。もしかしたら、物語によくあるように、『互いに意に沿わない』とでも思っているのかもしれない。

エリイとの初顔合わせの前に何冊か読んでみた『ご令嬢に人気の物語』には、そういった設定の恋物語が多かった。『親の決めた婚約者と不仲な令嬢に、以前から想いを寄せていた別の男性が想いを告げてくる』というような。

主人公のご令嬢も、それを横から攫った男も、『政略』というものを何だと思っているのだろうか。な。

これに憧れる令嬢が多いという事実には、少々頭痛を覚えたものだ。

『政略』である時点で、それは『有益である』という事に他ならないのだが。さて、何と答えようか……。

ふと隣を見ると、エリイが何やら小声ではそぼそと言っていた。

何を言っているのかと耳をそばだててみると、「ピンク様……、いや違うな。ドデカリボン様……? 略してドリボン様あたりか……」などと呟いている。

だから、やめてくれ……。笑ってしまっじゃないか……。

まさか、目の前に居る令嬢に、あだ名をつけているとは……。確かに彼女のドレスはピンクだが。頭と胸元に、大きなリボンが付いているが。

笑ってしまいそうなのを堪えつつ、ぶつぶつ言っているエリイに声をかける。

「君が婚約者であると、私にどのような良い事があるのだろうか」

その言葉に、エリイが心底不思議そうな顔をした。まあ、そうなるよな。

「『政略』なのでですから、政治的判断における利または益があるのでは？」  
うん。そうだよね。

「あ、愛情なんかありませんの!？」

だからそもそも、そんなものを欲して相手を選んでいないと言うのに……。

「いえ、普通にありますが？」

それが何か？ とでも言いたげな口調で言うエリイを、思わずまじまじと見てしまった。私の視線に、エリイが少し不思議そうに首を傾げる。

「何ですか？」

「いや……。嫌われてはいないとは自負しているが、君が私に対して『愛情』などを抱いてくれているとは思っていない……」

「ええ……」

『何で?』というような顔をするエリイ。

いやいや、そう思うだろう!?! そもそも、そんな話をした事もないし。

関係は良好であるけれど、それは君がきちんと自分に課された役割を知っているからだと思っ  
じゃないか。

「まあ、ド……つううん、失礼、こちらのご令嬢の言うような『愛情』ではないかもしれませんが、

殿下の事は尊敬しておりますし、好ましくも思っております」

ド……まで言つて言い直した部分が気になるが。彼女はもう、エリイの中では『ドリボン様』で確定なのだ……。可哀想に……。

それはさておき。

「好ましい？ 本当に？」

「嘘を言つて、何になります？」

「何にもならんが、取り入ろうなどと考える者は、皆一様に褒めそやしてくると相場が決まっているからね」

「取り入ろうなどと考えずとも、殿下に目立った非も粗もないのですから、そうしたら自然と称賛する以外なくなるのでは？」

これはまた……。随分と高く買われたものだ。

非も粗も、君になら見えるのではないかな？ まあ、こんな場でそんな事は言わないけれど。

それに――

「君が私を好ましいと感じてくれているのなら、とても嬉しい」

そう。自分でも意外なくらい、エリイからの好意を嬉しいと感じている。

ああ、もしかして。

これがご令嬢に人気の物語によく出てきた、『恋心』というものなのかな。

ご令嬢たちはその後、エリイに「『王妃』という立場とは」という説教を受け、すごすごと退散していった。

ただ去り際、ドリボン嬢がエリイに対し、「わたくしが不勉強でした」と頭を下げていたのは立派だと思った。家格、立場はエリイが格段に上ではあるものの、ドリボン嬢より大分年下である事は事実というのに。その相手に対し、きちんと己の非を認めたのだ。

エリイも「ドリボン様は大成なさるかもしれませんねえ」と嬉しそうだった。

確かに、彼女は中々に見どころがありそうだ。詳しく調べてみる価値があるかもしれない。

あと、名前が『ドリボン』で固定されてしまう前に、是非、彼女の本当の名を知っておきたい。この先の社交の場で、彼女を「ドリボン嬢」と呼んでしまう失態だけは避けたいからだ。

そうしてご令嬢たちも去り、挨拶もあらかた終え、私たちは退出する事となった。

会場の隅でエリイの母親であるマクナガン公爵夫人が、「エリイちゃん、ファイト〜！」と声を  
出さずに口をパクパクさせている。

そう言いたくなる気持ちも分かるほど、隣のエリイは疲労困憊だ。

「……さ、エリイ。私たちは退出しようか」

「はい……」

ふー……と息をつきながら、私の差し出した腕にそつと手を添えてくる。その手は当然だが、ただそつと添えられただけで、私を支えにするようなものではない。